

るのではないだろうか。そこにあるものは、ただ清潔、静寂。そして花、花、花。オーストリアやオランダなどでも一年間に国民誰もが約二万円のお金を花のために費っているという。とすると我が家では5人家族で一年間に10万円の花代ということになる。とてもである。

「なに花代？。花代つて芸者に払う料金の事かね？！」などと云われかねないのが現状ではあるまいか。だが欧州の人達だつて決してお金が余っている訳ではない。ヨーロッパ最大の電機器具メーカーのフリリップ社のお膝元オランダなどでさえ、国民の多くにとつては例えば、カラーテレビが高嶺の花で、手が出ないでいるのである。だが、自然環境を美しくという心状はお互い誰にも負けない位の気持ちでいるから、勿論、花壇や芝生などにも「花を摘むな」とか「芝生に入らぬ事」なんて無粋な看板なんて何処にもある訳がない。そんな事をする人なんて一人もいる訳がないからだ。それだけ自然を愛し、保護し、一木一草にまでの愛着がなみなみならぬものであるからだ。

その点、アジアなどだと、日本では、芝生ある所「芝生に入るな」の立看板が目につくが、東南アジアなどでも、花壇そのものは、どこへ行つても誠に美しく豪華だが、大抵は「花を摘むな」という注意書があり、白けた

気のする事は否めぬ事実である。中部太平洋のある島へ行った時など、花園の花が「ドーン・ピック」（花を摘むな）という字になるように植えられている所もあつて苦が笑いしてしまつた記憶もある。日本では木材にしても使用計画や需給の見通し、植林計画などがメチャクチャだから、瞬く間に、材木の供給、消費にアンバランスを来たし、北米やカナダ、フィリッピン、マレーシア、ソビエトあたりから大量に木材を買い付けていられた時代は未だよいが、それらの国でも、資源の枯渇を警戒し始め、あまり日本向けに輸出してくれなくなつたので今度は、なりふりかまわず北欧に泣きつき、スウェーデン、ノールウェイ、デンマークの人たちから「何故一体、我々の国の美しい森の木を日本人のために切らねばならんのか？」とたしなめられた事など苦がい思い出は絶え間がない。

先般、寒い季節に筆者はオオムラサキの幼虫の越冬状況を観察し、一部は捕獲して飼育し、安全に大きくなつたら元の木に戻してやるべく水戸市外の某所に行つた。オオムラサキとは、存知のように日本の国蝶で、その大型で美しい事、色も模様もスタイルも皆、見事な事。（特にオスは数百米はなれた所からでも、それと分る程豪快に行動し、その華麗なる紫色が金属様光沢を放つて